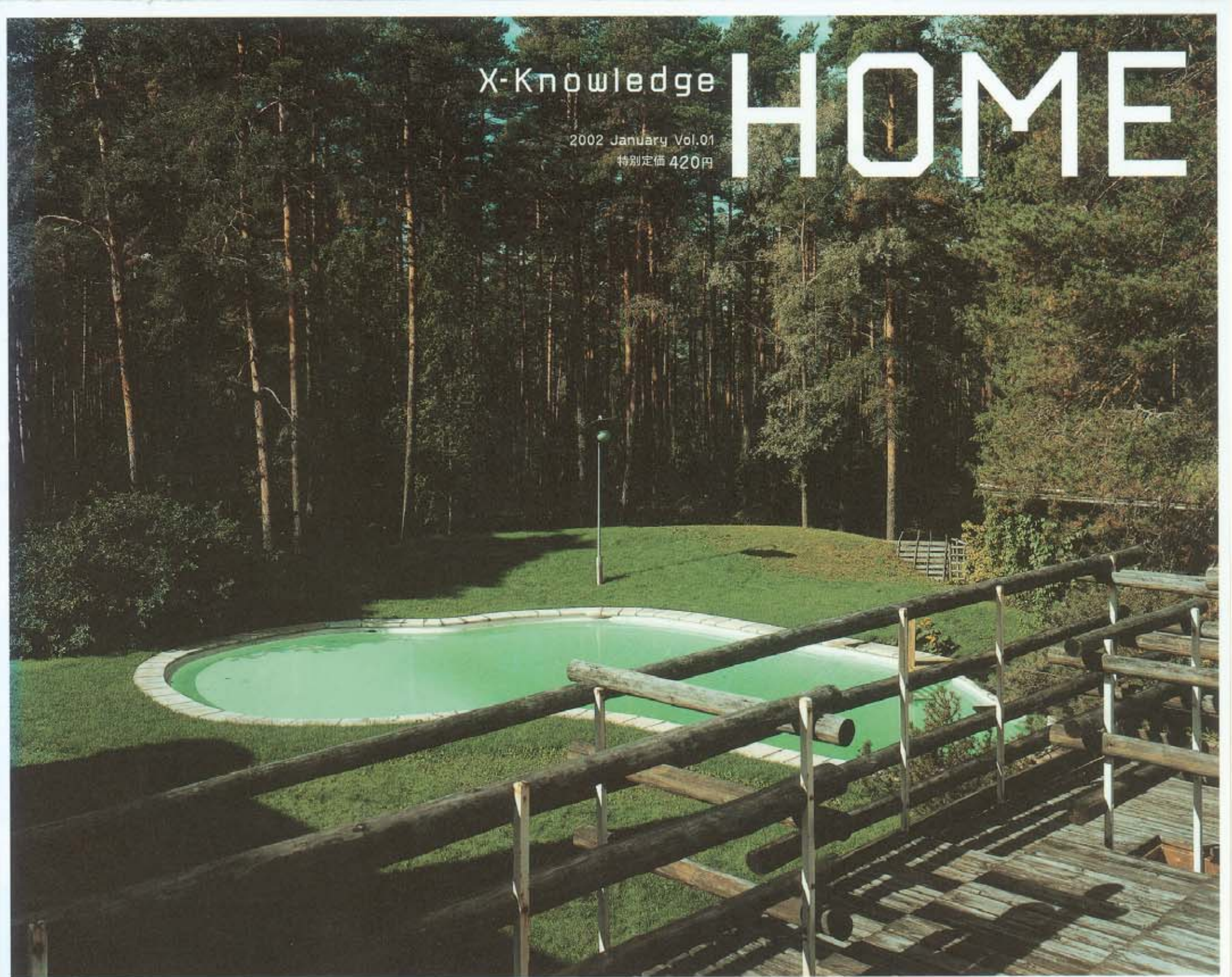


X-Knowledge

HOME

2002 January Vol.01
特別定価 420円



Who's Alvar Aalto?

70年代、自然と人間の共生を提唱し、有機的建築をつくり続けたフィンランドの建築家

アールトを立体特集

THE NATURE OF FINLAND, THE SPIRIT OF ALVAR AALTO

PALLOTUOLI - ECRO 401
S. 106

二十世紀の半ばといえば、アポロをはじめとする宇宙船が飛んだ時代でもある。ミッドセンチュリーのデザインやアートには、そんな「スペース・エイジ」の美学もあった。スペース・エイジ・デザイナーのカリスマ的存在といえば、エーロ・アールニオだ。彼はフィンランドのヘルシンキ在住。70歳を目前にして、いまなお現役のデザイナーだ。彼がデザインした椅子は、映画『2001年宇宙の旅』でも登場し、最近ではL' Arc-en-Cielの「NEO UNIVERSE」のビデオクリップでも使われている。そんなエーロ・アールニオにインタビューをする機会をもてた。待ち合わせ場所は、彼のデザインした椅子を売っているヘルシンキ市内のショップ。ミッドセンチュリーのころの物から、最新作まである。その一つ一つに腰をおろして、いろいろな気分を楽しんでいると、当の本人が現われた。親しみやすい人だった。

ぼくたちは、ショップの椅子に座って話をした。まずは、彼の代表作「ボール・チェア」について伺った。ボール・チェアは、巨大な球形がすばっと切れ、内部に腰掛けられるようになっている。それまで椅子と言えば、四本の足があって、肘掛があって、装飾が施されている。そういうものだった。ところが60年代に登場したボール・チェアは、そんな椅子の概念をぶっ飛ばすような衝撃的なデザインだった。あたかも宇宙船の中で使われているような、シンプルで力強い「球」という形。それは地球や天体の球のようでもあり、卵の球にも見え、また胎児をやさしく包み込む子宮の球のようでもある。映画『2001年宇宙の旅』のラストシーンは、胎児が宇宙遊泳している映像だったが、このボール・チェアに体を沈めると、そんな宇宙に包まれている気分になってくる。

このボール・チェア、いったいどのように発想されたのだろうか。しかし本人の説明によると、詩的でも未来的でもない。肩透かしをされたような、些細なことがきっかけだった。アイデアは「ボート」から得たのだという。

フィンランドは湖が多い。そんな湖畔の一つに、ボートが停められていた。1962年のことで、ボートの素材はファイバー・グラスだった。強化プラスチックとよばれるFRPで作られたボートだが、その質感や形態を見たとき、ボール・チェアのアイデアが浮かんだのだという。まさか、手漕ぎのボートとは！

宇宙船のフォルムとか、天体とか、そういう新しい時代のイメージから始まったのかと思っていたが、なんと小さなボートである。そもそも「スペース・エイジ」というネーミング自体、マスコミがつけたもので、エーロ・アールニオにとっては無関係のことだと本人はいう。

しかしボートがインスピレーションの素だったと聞くと、ボール・チェアが色あせて見えるのではなく、逆に湖畔に浮かんでいるボートが神々しく見えてくる。そもそも湖面に浮かんで揺れるボートは、あたかも「宇宙遊泳」しているようではないか。ボートは、未来の椅子なのかもしれない。

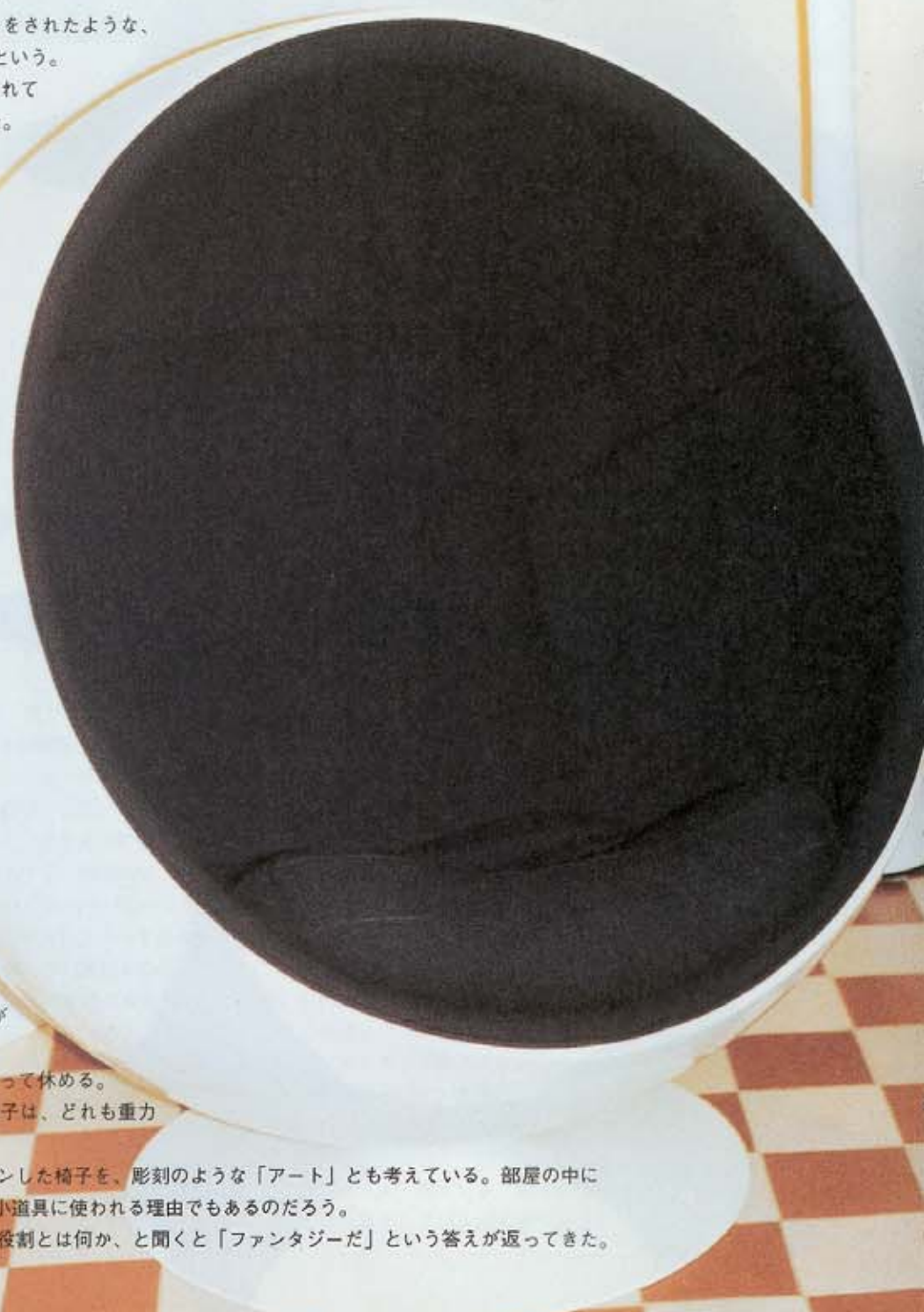
エーロ・アールニオは、続いて「バブル・チェア」をデザインする。天井からぶらさがった鎖に吊るされた椅子である。ボール・チェアに囲まれた空間が暗かったの対し、バブル・チェアでは透明な素材を使い、中も明るい。鎖に揺られ、まさに宇宙か海の中を浮遊している感じである。椅子というのは、ただ座るだけのものではない。体を休めると同時に、「心」も休めるものだ。アールニオの椅子には、そんな「心のデザイン」もある。

アールニオの作品には「トマト・チェア」など、いっけん硬くて座りにくそうなものもある。ところがそこに体を沈めると、ふんわりと包み込まれる。椅子は座ってみて、はじめてその良さが分かる。

アールニオの最新作は、ロッキング・チェアだ。体を前後にゆすって休める。ふつう椅子は体重を受け止め体を支えるものだが、アールニオの椅子は、どれも重力から体を解放してくれる。宇宙的だ。

しかし椅子は、見るものでもある。アールニオは、自分のデザインした椅子を、彫刻のような「アート」とも考えている。部屋の中に置かれた、オブジェである。それが映画やミュージック・ビデオの小道具に使われる理由でもあるのだろう。

アールニオは「椅子には、座る以上の役割がある」という。その役割とは何か、と聞くと「ファンタジーだ」という答えが返ってきた。ファンタジー。それがスペース・エイジの到達点なのだろう。



Mid-Century
in
Finland





Curry in Finland